

## エッセイ

やじ馬昆虫撮影記  
(その7 米国のカマキリ)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

「昆虫の専門家」とか、「昆虫を撮影している」という自己紹介をすると、「昆虫の中では何が一番好きですか?」と聞かれることが多い。いろいろ好きな昆虫はいるが「カマキリが一番好きです」と答える。細い体で大きなカマを持ち、獲物をむしゃむしゃと食べる姿に惹かれたのだろうか、小さいころから毎年飼育していた。

ある年、30匹のカマキリを世話していた私は、毎日ランドセルを置くとすぐ空き地に向かい、餌とするバッタを日が暮れるまで採集していた。今になって思えば毎日バッタを2匹ずつも与える必要はなかったのだが、当時の私には知る由もなかった。そんな私に呆れ果てた母からとうとう「飼うのは10匹にしろ」と命じられた。飼ってはいけないと言われてもおかしくないのに、10匹も飼育しているとは、自分の母ながらすごい人である。昆虫に対する興味を摘み取らず、いつもそばで一緒に見ていてくれた母は、今も天上からこの私を心配して見ていることだろう。

さて、米国に来たのだから大好きなカマキリを観察してみたいと思ったのだが、昆虫好きの人でも「この街ではカマキリを見ない」と言っていて、植生が単純なために餌も少ないからか、とがっかりした。

もちろんそれで諦めてしまうことはないで、草花の多いバタフライガーデンで熱心に観察していると、とうとう幼虫を見つけることができた。そして夏のある日、

大きく成長した成虫に会うこともできた。

しかしどことなく見慣れた外観に、異国のカマキリという感じがしなかったので調べたところ、このカマキリは1896年に中国から入ったオオカマキリの中国亜種であった(図-1)。しかもフィラデルフィア近郊に初めて入ったらしいので、ある意味由緒正しい個体群かもしれない。でもそんな背景を知っても、見慣れた形態であるためか少々拍子抜けした。

その後も公園とか少しでもカマキリがいそうなところを探し求めていたところ、とうとうオオカマキリとは違うカマキリを見つけ、撮影にも成功した(図-2)。やや細身でカマの付け根に大きな斑紋があり、米国原産のカマキリかとワクワクしたが、調べてみたら1899年にヨーロッパから入ったウスバカマキリのヨーロッパ亜種であった。ウスバカマキリは日本にも別亜種が生息しているが、これまで撮影したことはなかったので、意外な出会いだったが、それでもまだ物足りなかった。

しかし結局見つけたのはこの2種だけで、念願だったCarolina mantisのような北米原産のカマキリとの対面は叶わなかった。それでも異国の地でも元気に生活しているたくましいカマキリたちを見かけると、亡き母のことを思い出し、私も元気に頑張ろう、という気持ちになるのであった。



図-1 オオカマキリ (中国亜種 in USA)



図-2 ウスバカマキリ (ヨーロッパ亜種 in USA)